



女堀の  
実像を  
求めて

飯島 義雄 著

みやま文庫

## はじめに

上毛かるたに「裾野は長し赤城山」と謳われ、遠望する赤城山麓の優美さは群馬県民にとって郷土の誇りのひとつである。その赤城山南麓の裾部を切り裂くように一筋の堀の跡が遺されている。

女堀である。

この女堀は古くから注目され、尼將軍北条政子が笠懸野の開田のために利根川の水を引こうとしたとか、かんざしで一夜にして掘り上げられたとか、開削の時期やその主体などについてさまざまに説かれてきた。そこには、この堀の由来について直接的に語る史料が見当たらないという背景があり、いづれも伝説や憶説の域に留まらざるを得ないというのが実情であった。

しかし、この女堀をめぐる転機が訪れた。昭和五十年代半ばから後半にかけて赤城山南麓における大規模な圃場整備事業ほや工業団地造成事業等が計画され、事業実施以前に女堀が広範囲に発掘調査されたのである。それまで、いわばベールに覆われていた女堀がその素顔を見せることになった。史料がほとんどない女堀について、確実な資料が得られることになったのである。発掘調査の結果は生々しく、見る人に鮮烈な印象を与えたと見えよう。女堀を開削した際の作業員

の足跡や鋤先の跡が見つかり、掘り上げた土の排土の下からは畑の畝跡が検出された。掘り上げる作業単位である小間割や作業員の組織単位毎の開削結果を表す工区境の存在など、発掘調査の威力を見せつけるのに充分であった。

そうした発掘調査の成果を総括した報告書が昭和六十年（一九八五）に刊行された。ここでは、女堀は中世初期に灌漑用水のため前橋市上泉町で桃木川から取水され、伊勢崎市国定町まで引水されようとしたが、未完成に終わったと理解されたのである。そして、その未完成の理由として、設計・施工上の測量ミス、さらに、途中で分水することなく終末点まで通水しようとした強引さなどが挙げられた。こうした理解は、報告書刊行に前後して普及書や雑誌そして新聞などを通して喧伝された。

筆者が女堀に係わる契機になったのは、女堀の取水先を桃木川とすることに違和感をもったことによる。それは、古代・中世の灌漑用水遺構である前橋市天川原町所在の「女溝」の検討を行う中で、利根川の流路は古墳時代には利根川により浸食された広瀬川低地帯の中を、北部から南部へ移っており、女堀開削時の中世初期に桃木川筋へは利根川から人工的に引水されていたことになると理解していた。女堀の取水先が桃木川であるとすれば、真の取水先は利根川であるとなければならない、と考えざるを得なかったのである。

女堀と利根川を繋ぐ遺構があるに違いない、との思いで女堀の踏査を始めた。すると、それま

での女堀に関する理解に次々と疑問が湧いてきた。少し腰を落ち着けて取り組もうと決意した次第である。

長さ十数kmに及ぶ長大な遺構である女堀について、遺構そのものあり方、遺構の地形の中でのあり方、そして発掘データや地形図・絵図・航空写真、さらに先人そして地域の人たちの認識等に学びながら、女堀の実像に迫りたいと思う。



# 目次

はじめに

## 第一章 女堀の経路に関するこれまでの理解と検討の方法

- (1) 『前橋風土記』における女堀……………三
- (2) 『西山之烟』における女堀……………六
- (3) 峰岸純夫氏による女堀の経路の理解……………九
- (4) 女堀の検討の方法……………二一

## 第二章 女堀の取水先は桃木川か？

- (1) 女堀は桃木川と接続するか？……………一五
- (2) 赤城山と藤沢川……………一八
- (3) 土地改良以前の女堀の観察記録……………二〇